

HIMALAYA

ヒマラヤ
No. 176



1986 JULY

日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

—— 未踏のロマンを求めて ——

ラブチェ・カン（7,367m）登山隊隊員募集

こつこつと積み重ねてきたH A Jの登山実績と国際交流・渉外活動が実を結び、1987年秋にチベットの未踏峰ラブチェ・カンをチベット登山協会と合同で登山することになりました。この山はヒマラヤ登山の大先輩であるE・シプトンがメンルンツェ偵察（1951年）の折りの報告で「その先のチベット高原の彼方に人跡未踏のラブチェ・カン連峰の山々が望まれた」と記しているとおおり7,000m峰数座を含む未知の山群の主峰です。合同登山の主旨を理解されて積極的にご応募下さい。

1. 目標の山 チベット自治区 ラブチェ・カン
（拉不及康峰・Lapche Kang 7,367 m）
2. 時 期 1987年9月～11月（75日間程度）
3. 募集隊員 10名

4. 個人負担金 120万円
5. 隊員資格 ①H A J会員であること ②個人負担金を納入でき準備に参加できる者
③登山技術・体力・健康状態・協調性など合同登山の主旨に合致する者



表紙写真

荒れたモムヒル氷河にくたびれきってサイド・モレーンを登るとチョゴリンに着いた。此の地から眺めるデュット・サール（6,858m）は、素晴らしい氷の尖峰だ。（写真はマラングッティ・サールの途中から見たデュット・サール）
（東京志岳会マラングッティ・サール登山隊）

ヒマラヤ No.176

1. 〈座談会〉8千米峰登山について語る
12. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・インフォメーション〉
14. 躍進するチベット登山協会
15. 昭和61年度日本ヒマラヤ協会通常総会報告
25. ヒマラヤの標高について ————— 安藤忠夫
28. 事務局日誌・寸感

〈座談会〉

八千米峰登山について語る

フランスの山岳雑誌“VERTICAL”編集部呼びかけでメスナーのシャトーにヨーロッパ各地から次の7人の登山家が集って、ヒマラヤ登山の展望について意見を交した。

- DOUG SCOTT (イギリス)
- EHRAND LORÉTAN (スイス)
- REINHOLD MESSNER (イタリア)
- WANDA RUTKIEWICZ (ポーランド)
- ERIC ESCOFFIER (フランス)
- PIERRE BÉGHIN (フランス)
- WOJCIECH KURTYKA (ポーランド)

登山料は頭割りで

—— この集りに何を期待されますか。

W・K 我々の概念は多岐にわたっている。それぞれの動機について語りあいたい。西側のヨーロッパ人は、高山のコレクションに走っている。8,000 m 峰にこだわって他の素晴らしい山を除外する事はヒマラヤと云う山の価値を下げるのではないか。

—— それは西側に限られていると思いますか。
8,000 m 峰14座の競争にメスナーの次にククチカが居ますけど……

W・K 確かにククチカは変った。14座の8,000 m 峰を登りたがっており、困難さを求めている。

—— 現実の問題についてはどうでしょうか。

W・R 登攀だけでなくヒマラヤ諸国の登山規則などについても提議してみたいわ。

P・B 昨日、ダグが許可取得の難しさに関して、何か出来ることはないかと話したネ。

R・M いや、簡単だよ。

D・S メスナーや僕にとっては簡単だが若い連中にとってはそうでない。

R・M パキスタンでは同じ山の同一ルートに5隊も許可を与えたものだから全てが台無しになってしまった。

D・S どうして、例えばアルプスのドリユなどで

そんなことあるかい。

R・M ヒマラヤでは話が別だ。若し、既にルートが他の隊で占められていたらどうする。

D・S 許可の値段について話そう。例えばK 2は2人でも2,500ポンド、20人でも全く同額だ。こう云う問題についてアルパイン・クラブなどが互いに協力すればレギュレーションに対して何らかの声明を起草することができるのではないだろうか。また、UIAAのような組織は関係諸国に対して知らしめることもできよう。例えば、隊単位ではなく、一人いくらと云う具合に支払うようなことを提案できるのではないだろうか。

R・M その場合、我々は許可を貰えなくなるだろう。

P・B 20人の隊を優遇した方が、彼らにとって利益は多いからな。

R・M その通り。彼らは金を欲しがっている事を忘れるな。

W・K 大きな1つの隊に許可を与えるのと、多くの小さな隊に許可を与えるのは結局同じだよ。

P・B 20人の1隊は1人の20隊と考えればいい。

D・S その場合は、もっと違った方法で組織されるだろう。確かに彼らは同じ額の金額を手に入れることが出来るかも知れないが、我々は外交官のように振舞い彼らに公正さを正さねばならない。

パキスタンでは既に6,000m以下のピークは開放（ロイヤリティー無しで）されている。我々は彼らに“ブラボー”と云いつつさらにもお願いするのだ。

例えばL・Oの問題がある。これらの国々は貧しく幾つの場合、国境問題も抱えているので判るのだが、それでもネパールなどでは4人以下の小さな隊の場合、L・O経費が全体の20～25%にも達している。微妙な国境の場合を除いては、L・Oなど無しで登っても良いのではないかな、エベレストなどもその人気度から云っていららないと思う。我々は6,000mちょっとのクスム・カングルを自由に登ることが出来た。ところがアマダブラムやカンテガではL・Oを1人義務づけられた。これなどは変えることが出来るだろう。

出発時に各自入山料を払えばいい。L・O経費をうかせられれば国に対してもう少し払うことも出来るだろう。アラン・ラウスの考えは、金を払ってもっと自由に登れるようなもっと一般的な許可システムを作ることである。

W・K L・Oの問題については、大部分の頂が国境沿いにある為、コントロールの問題があるのだろう。

E・E 政府はL・Oを地域によって命ずるのであって、隊に命ずるわけでない。

D・S その地域を巡回するのは2～3人でまかなえるだろう。

R・M パキスタンでは行っている。

ヒマラヤに厭きてきた

W・R ラインホルト、あなたはこの集りに期待していることをまだ云ってないは……

R・M 特にヒマラヤ登山の新しい考えだね。と云うのもヒマラヤに厭きてきたからさ。

（その場のどよめき）

R・M 真剣だよ。

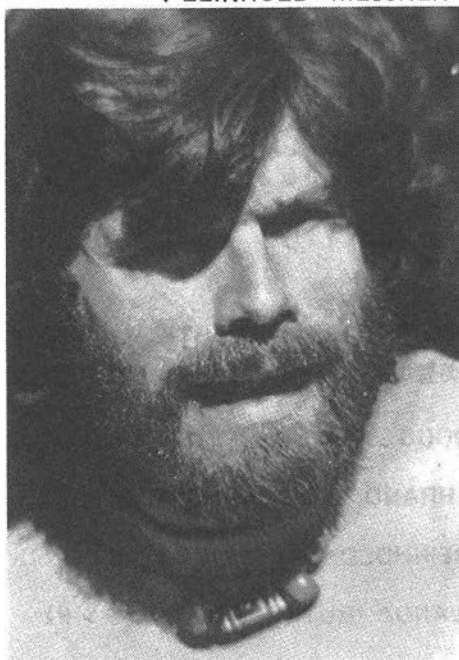
D・S 年とったな。

R・M 私は他の事に引かれているんだ。僕をこれ迄登ることに追いやっていた理想を失ったんだ。

W・K 多分君がしなければならぬ事でなく、したいことをほんとうにするとしたらネ。

R・M 誰であろうと僕を強要することは出来ない。

D・S いずれにしろ誰も君に強要なんかしやしないさ。



いさ。

R・M 僕は他の分野を開拓したい。特にチベットの砂漠とか。今年の冬はマカルーに行くつもりだが、それは僕の最後の遠征になるかも知れないし、あるいはそうでないかも知れない。若し、ポーランド人と2人のフランス人がこの秋ローツェ南壁を成功したら、僕は来年行かない。従って14番目の8,000m峰は登らないことになる。

D・S 君は今になってそんな事を云うのか。

W・R 疲れてるの？

R・M いや、その事に興味を失ったんだ。

D・S もともとの征服は何だったんだい。8,000m峰の征服だったのかい。

R・M いや、ここ10～15年の長い間は、大岩壁であって、それは（8,000m峰登山）一つのスタイルだった。

D・S まだ一杯残っているじゃないか。K2やマカルーの西壁のように。

R・M うん、マカルー西壁はここ3～4年のうちに2人でやってみたい。然し、それが僕の唯一の目的ではない。5年前は、僕にとって良い遠征をすることが死活問題だった。困難なルート、良いスタイルと云ったものが……

W・K 素敵な仲間と共に

R・M 僕を認めるような人達と一緒にいるためな

ら何処でも行くよ。そう云う連中が今、この場に
いるけどネ。

W・K 君が云った事は僕を不快にさせる。僕は山
を通して人生や真実を見つける。若し、それだけ
の価値がなくなってしまったのなら、自分が抜け
殻になったような気がするじゃないか。

R・M 僕はもう登りたくないとは云ってない。大
体において僕は山に住んでいる以上そんな事は云
わない。僕の興味を引くものは多くの可能性があ
り、山が全てではない。その変化は僕には何の問
題もなく、僕は充実していると感じている。

P・B 代りに何もないと云うのは悲しいことだ。

R・M ここ2年間、この城の再建は少なくともア
ンナプルナやその他と同じくらい重要だった。

W・K こんな状況を自分にあてはめることは出来
ない。全ての点において。

D・S ラインホルト、トルコの諺に「我々は、我
我の城の部屋に生きている。」と云うのがある。
つまり、全ての部屋を使うのではなく、僕にとっ
て興味のあるのは山と云うように、城の中のどこ
の部屋が生きているの助けになりうるかと云うこ
とを知りたい。例えそれが地下室であろうとも知
ってみたい。人間の出来る最大限の潜在能力を引
き出すのを助けうるのは何かと云うことだ。

R・M 然し、部屋をあけるのには数千もの他の鍵
がある。アルピニズムはその内の1つでしかない。

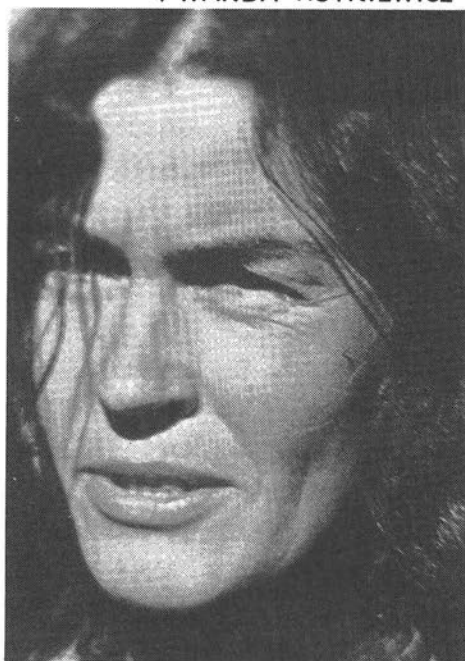
D・S 多分、我々はアルピニズムに対して余りにも自
己中心的であるために、その結果、その小屋に滞
っていると云うわけか？我々は全ての事が出来る
訳ではない。たまたま我々は登っている。(我々の
運命？)これが我々の道なのだ。若し、君たちが
全ての道を通ろうとするならどこも通れない。

W・K 僕にとって山はたった一つの探求の場であ
り、それを何かと交換するつもりはない。仮に、
世界で最も美しいパレスを提供されてもだ。

ヒマラヤに六級時代は来るか

W・R 然し、ラインホルト、何か若い人達の助け
になるような考えはないの？

R・M もう余り考えは持っていない。K2の南西
稜を2～4人でやると云うのが残っている。マカ
ルー西稜やヴォィテクとシャウワーがやってしま



ったがG4西壁も素晴らしい思いつきだった。マッ
シャールブルムも同じく登られた。それらのバリエ
ーションしか残っていない。

P・B ヒマラヤはもう駄目かい。

W・K いや逆なんだ。我々はまだ始めたばかりな
んだ。これ迄は競技のように登ってきたが、それ
は冒険的な競技として行なわれてきたにすぎない。
本来それらはただスポーツとしてあるべきものが、
我々の世代は未だこうした冒険精神を信じている。
然し、新しい世代は我々とは全く違った考えを持
つだろう。山における各記録には3つの要素があ
る。先ず最も大切な技術的なこと。次に危険性。
そして肉体的なものがある。特に最近、最も発展
してきたのは体力的な面である。然し、技術面で
は何ら新しいものはなかった。8,000m以上の全
てのルートは「易しい」

R・M 私はそれらが全て易しいとは思わない。

W・K 雪の上ばかり登っているものなあ(笑)

P・B そんなことはない。

R・M ローツェ南壁はそうじゃない。

W・K あそこだってそうだ。チェコ・ルートなん
か斜面で少し氷があった他は雪ばかりだ。

W・R 誇張しすぎよ。

W・K ウォーカー稜ほど困難なルートはないよ。

R・M アンナプルナではウォーカー稜のような

“Coin” 部分がいっぱいあった。

W・K 然し、誰がするの？ そんな大遠征。

R・M カタロンの遠征じゃないだろうね。

D・S ヒマラヤは第1次世界大戦前のアルプスをおもわせる。僕の考えでは将来における可能性は、K 2の西壁のような幾つかの大きなルートにあると思う。

—— ヒマラヤの六級は近く約束されてますか？

R・M スタイル次第だ。

W・K それについては、我々は皆賛成だ。アルパイン・スタイルに行きつく。伝統的な遠征ではそのルートを評価することは出来ない。若し、マカールのダイレクトに100人のロシア人をつぎ込めば彼らは成功するだろう。然し、この場合いったい誰がルートを開いたのか？ 30人あるいは2世代の登山家にわたって？ 本当にそのルートは開かれたのだろうか。何故なら3 kmにわたるロープを登ることはルートを登ったとは云えないからだ。

E・E ただ一つのスタイル、それがアルパイン・スタイルだ。

R・M O・K。 然し、同一ルートにアルパイン・スタイルで5隊が入ったとしたら全てが変わる。仮に固定ロープがなくてもトレースやキャンプ地が残る。

D・S 悪天候の何日後ならトレースは消える。

W・R ナンガ・パルバットで私たちは誰にもトレースされていない頂上に達したワ。

R・M 然し、この夏、K 2を尾根伝いに登ることは隊が多過ぎて不可能だった。

W・K 確かにB・Cからユマールで出発出来た。

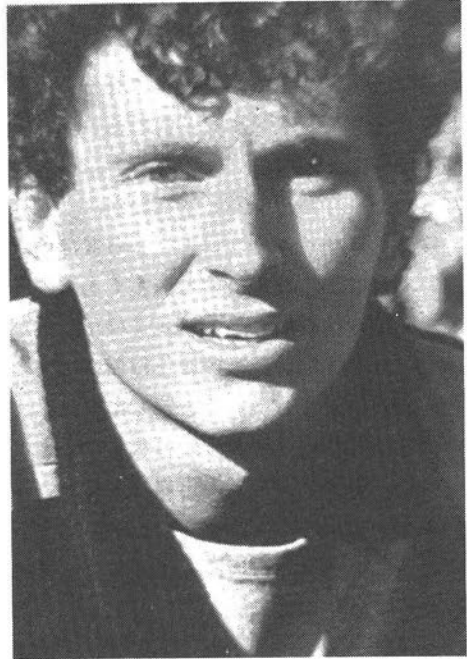
—— エリック、君は皆から攻撃を浴びていると思わないか。

E・E いや、全く彼らが正しい。

R・M 新しいルートについて語るべきだ。さもないと話ができない。いずれにしろ私にとっては終わったことだ。

—— それは簡単だ。あなたはもう十分長い間遊んできたんだから。

R・M 今夏は何がされたんだい。マッシャーブルム、G 4、そしてポーランドの大きな隊がローツェ南壁、他は新しい試みに危険を冒そうとはして



いない。

W・K 何故なら、君がした8,000 m以上の数やお金を得ることは簡単だが、ただ冒険を売るのは難しくなっている。

P・B G 4を例にとるならフランスではお金をみつけるのは不可能だ。G 4は全く知られていない。然し、エベレストとなるとそこには雪しかないが、そこはやはりエベレストなんだ。大部分においてお金を得、スポンサーを見つけることが流行になり、偏執的になる。

メディアの罪悪

W・K 一般大衆に対して、成功の位置づけが必要だ。

W・R それは高さよ。

W・K 8,000 mの持つ魔力に僕は動じない。8,000 m峰の継続登山によって得られる肉体の感銘も僕はそんなに好きでない。この8,000 m峰をコレクションする傾向はメディアによってデッチあげられたものだ。何故なら、若し、僕が6、7、8あるいは9つの8,000 m峰に登ったなら誰もが僕を認めるだろう。（笑いざわめき、そうだそうだ）お金だけの問題でない。コミュニケーションの問題でもある。若し、君達が8,000 m峰を10座登ったと云えば君達の方が良いのだ。

W・K 基本的には、我々に情熱をもたらす理由は我々も知らない。我々個人の中の深底には頂上には抑え難い引かれるものを感じるのも確かだ。ラインホルト、僕は君が最もすぐれた登山家になるために8,000m峰をやろうとしたのではないことは判る。然し、そのことがある種の征服の杓子になってしまった。

P・B ラインホルトにとってこの種の快挙は新しいものだったかも知れないが、でも今はもう終わった。

D・S 雑誌の責任に関して、僕は8,000m峰登頂者のリストを公表すべきではないと思う。それは競争化を助長させるものであり、人間である以上、我々もこの種の論拠には敏感であり、特に野心を持った若者にとっては盲目的に記録に走ることになる。

R・M 僕は知られた登山家に記録に走る者がいるとは思わない。例えば、僕は8,000m峰を12座ポケットにした事を自慢には思っていない。僕はそのやり方を誇りに思っている。1975年のアルパイン・スタイル、あるいはベースに戻らないで8,000 m峰を2座連続登頂した事をクチカはノーマル・ルートを通らない連中と一緒にした。然し、多分8,000m峰14座に関心を持つ新しい世代があるだろう。それに僕は何も感じない。皆は僕の事を初めから8,000m峰のコレクターだと批評しているが、僕一人だけがコレクターではない。1970年のナンガ・パルバットはノーマル・ルートではなかった。

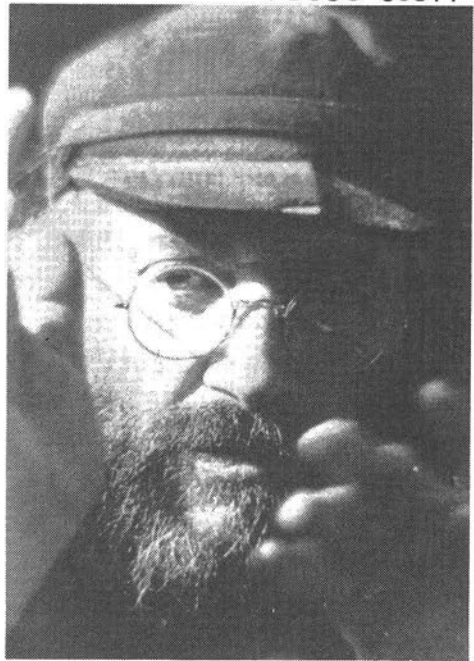
W・K それは君の信条であったかも知れないが、外から見れば……

R・M 若い連中に説明しようじゃないか。'70年代は今の10倍も困難だったことを。装備や経験においても可能性は非常に限られていた。今は僕も年を取った。然し、僕には大きな山を登ることは今から15年も前の私が絶頂にあった時よりも容易になっている。

—— 他の皆さんは、8,000m峰を登るのにメディアの方からプレッシャーを感じた事がありましたか。それは自由のない身ですか。

P・B 他に目を向けるには勇気がある。然し、結局のところ金に舞い戻る。

E・E 初めは8,000m峰を登る事を実際強いられた。



然し、続いて7,000m峰や困難なルートを強いられるようになり、もう自由はなかった。

W・R 私はK2を2度失敗したわ。それでナンガ・パルバットをより容易に成功することを考えたの。そして、それは不可欠だったわ。

1年に8,000m峰を14座

—— 1年で8,000m峰を14座登ると云うのはどうですか。

P・B 流行の最後の挑戦だ。

R・M 乗り気になれないが、それは可能だ。

W・K ヘリコプターで？

P・B それはラインホルトには意味がない。然し、若者にはそれしか残されていない。

R・M どうして彼らはK2の西壁をソロでしないのかな？若い連中がもし8,000m峰14座をノーマル・ルートからしか登らないとしたら、彼らは我々の運動（考え）を全く理解していないと云う事だ。

P・B 彼らが大衆に認めて貰うためには、明確な数値が必要となる。例えば22時間でブロード・ピークを登るような。僕が思うにプロフィットの三部作24時間なんかは価値がないだろう。

R・M いいや、それは難しい登攀として立派な快挙だ。1年に8,000m峰14座は余りに理にかないうる面白味がない！

P・B 若い者にとってヒマライズムは他のと同じようにスポーツになっているのでどうにも出来ない。

—— 皆さんは、こうした変化に対して居心地悪く感じていませんか。

W・K 我々は、冒険とスポーツと云う2つの潮流の間にいる。

P・B 若者にとってヒマラヤは、ジャンプやテニスと同じなんだ。冒険の空間は益々狭くなっている。ヨットのように10年前の大西洋横断は素晴らしいものだったが、今ではもうただ日数、時間を競い合うスポーツになっている。

E・E それは当然の成り行きだ。然し、また、アルプスのように選ぶことも出来る。

—— 冒険は終わったのでしょうか？

W・K 若し、何としてでも我々の成功を売ることになれば、解決法は見つけられる。

W・R 兎に角、買い手を探さなくてはならないわ。

W・K 純粋にスポーツ的な面を売り、冒険面は残しておくことが出来る。

P・B 商業化した冒険は、もはや冒険じゃない。冒険とは個人的なものであるべきだ。新聞などでよく、氷の中に飛び込むとか、自転車でトレッキングするとか、逆立ちしてチベットを渡るとか、これらは冒険じみてはいるが、そうじゃない。

W・K 人間が最大限の危険の淵にいる時、生きるか死ぬかの時に冒険は始まる。

E・L ヒマラヤでは、なお印象づけることがある。8,000m峰であろうとなかろうと多くのやるべきことが残っている。ただマジック的な数値のために8,000m峰をやっちゃいけない。まず、難度が増しているかどうか、中味が濃いかどうかだ。メスナーは多分引退するのだろう。

E・E 彼はもうその気がないから云ったんだ。

P・B 若い世代は、もう銃で撃ちあうしかないよ（笑い）

E・L 冒険は自分だけのものさ、他の人達のものじゃない。然し、金がいるため2つが妥協するんだ。

山は誰の金で登るのか

—— 皆さんは、遠征へは金稼ぎに行くのですか、



それとも次の遠征の資金を準備するためですか。

P・B 若し、君が君のちっぽけな冒険のために12ケ月中11ヶ月仕事に行くならそれは無理な事だ。

R・M 皆んな金と成功を結びつけるのは間違っている。若し、僕が10年留って働けば、さらに10もの城を手に入れるだけ稼ぐだろう。僕は遠征に出る時、自分のお金を使い果す。僕に近い者は「行くな」と云ってやまない。（笑い）そして「講演をしろ、映画を作れ、本を書け」と云う。僕らは登る事によって金を稼ぐのじゃない。

P・B 君は君の快挙によって有名になり、それが君に金をもたらす事になったんだ。

R・M 名を売る事は出来るさ。唯、それだけの事だ。

D・S 何であろうと売る必要はない。昨年、我々がほぼ成功したチャムランとマカルーのために僕達は1人頭1,200ポンドかかった。それだけ集めるのに皆働いた。中には大工、電気工もいた。僕らは共通経費を何人かの人間で分けあって、2～3ヶ月ネパールへ出発できた。イギリスに居ても無益な事に浪費するのがおちだ。

E・L スイスでも同じさ、皆いろんな仕事をする。ワインを売ったりして小銭を貯えている。何故ならスイスでは、山の装備関係の大きな会社はなく、他の国のように登山家達に有利になるようなスボ

ンサーは得にくい。

P・B 金と山は2つの別のものだ。然し、若者達はボルグになることを夢みる、ただ名前に寄っただけで金を手に入れる事を、然し、僕は山ではそれが可能だとは思わない。ボルグが試合に勝つように、アイガーを10時間で登ったと云った記録のゲームにでもならない限り無理だ。

W・K 山は金を稼ぐには良い方法じゃないよ。

R・M 余りこの問題にこだわるべきじゃない。金とアルピニズムは関係ない事だ。教授でいて夏に登るか、あるいは僕のように“フリー・ランス”でいるべきだ。

W・K 然し、もし君が1年中山に居たい時は？

R・M その場合は勿論、誰かが僕に金をよこす必要があろう。然し、それは僕の目的ではない。而も、僕は、“ほらタダだよ、ここに2万スイスフランあるからエベレストへ行ってこい”なんて云って呉れた人にはお目にかかったことがない。それよりも、例えば物乞いするんじゃなく、物を書く才能を売った方がずっと良い。

P・B これは取り引きだが、頂上にタバコのマークの入った旗を立ててくると云ったものだったら。

D・S 危い！アルピニズムがテニスやオートレースのようになるんじゃないかな。山の本質と云うものを失うことになる。

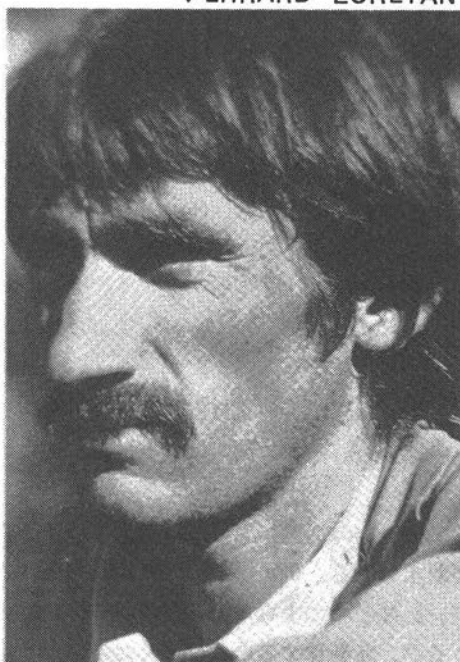
R・M 広告に身を売らなかった者がいると思うか。誰もいないじゃないか。

D・S それは程度問題だ。ヨーロッパ大陸では殆どいまい。然し、イギリスでは、ボニントンを除けば……

R・M 僕は暫々、新聞誌上の広告で君の名前や写真を良く見かけたよ。

D・S 僕らは装備が必要だ。仮にベルグハウスが僕らに遠征のためのザックを呉れたとしても、それは製品が個人よりも山に関連しているからだ。誰もがなおざりにされず、アプローチがより確かなものになる。なによりも殆どのメーカーが望んでいる事だ。

R・M イギリス人達は、どのようにしてアンナブルナやエベレストが出来たと思っているのかね。若し、ボニントンの地盤を固めなかったらどうだった。



D・S 英国人は1921年以来しばしばエベレストへ行っている。そして、その間、クリス・ボニントンを除いては誰も身を売るようなまねはしなかった。不条理だ。君は自分の身を正そうとしているだけだ！

R・M (万年筆を投げ) 絶対そんなことはない。僕にはそんな必要ない。

D・S 僕が気をもむのは、それがテニスやオートレースのように競争の精神を生むことなんだ。我々は金も装備も必要だ。特に若い登山家にとっては。然し、余り行きすぎてはいけないんだ。危険なのは、人が意図を離れてスポンサーのためにしか登らなくなると云うことで、金が途切れたら登らなくなると云ったことなんだ。動機がそんなに貧しく物質主義になっているのだろうか？(笑い) 我々にも責任がある……

記録に盲目的になってはおしまい

P・B アルピニズムは他のスポーツとは異なる。然し、そうなりうる……

—— それは重症ですか？

W・K 何かを失いつつある。

R・M アルピニズムは、他のスポーツと全く違う訳ではない。恐らく比較できないであろう。然し、より良いともより悪いとも云えない。実際、アル

ピニズムに特別なものはない／

D・S テニスにはない何か特別なものがある。

W・K 絶対だ／

P・B 全くその通り。

R・M 我々にとってのみ、それは特別なことだ。

W・K 正直云って山には、他のどこにもないある魅惑がある。一瞬の間に他よりもすぐれたある種の価値を感じる。

R・M オートレースはすぐれたスポーツじゃないのかい。

W・R レースの後、彼らは家に帰り、着替をして疲れを癒すわ。然し、彼らは頂上には行かないのよ。

W・K 幾つかの活動においては他人より多くの能力が要求される。例えば、ぶどうを10籠食べる

(笑い) などのつまらない記録は、一つの能力で足りるが、家を建てるのには多くの知識が要求されるように、アルピニズムと他のスポーツでは違いがある。

E・L 僕にとっても同じで特別なものだ。まず、それは2〜3ヶ月にも亘っておかれる規律であること。家には帰れないし、頭脳面で既に他のスポーツよりも複雑である。次に、組織問題を山ほどかたづけなくてはならない。特に遠征隊の隊長として、且つ、また、会計士としてあらねばならず、多くの人とコンタクトを取らねばならない。現地に於いても同じだ。

W・K あらゆる領域の人達と会って、何にでも手を出す。つまり、ボクシングなどよりはずっと複雑なスポーツだ。

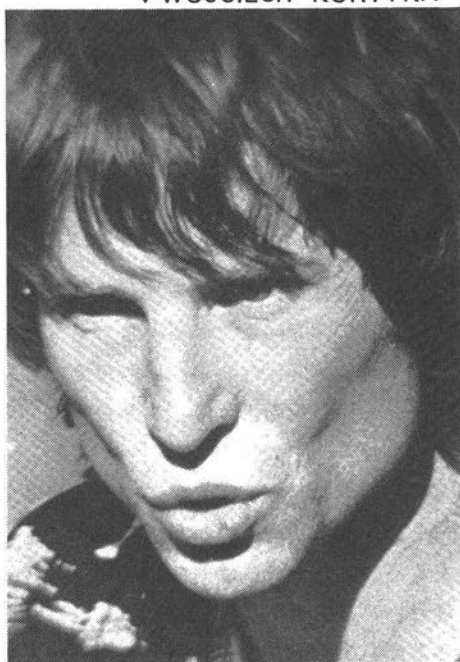
R・M ボクサーだってネパールには行ける。そして住民と暮らすことだって出来る。

D・S 根本的な論拠は、まずなにより山に登ることだ。君はただコートにいるためにテニスをするかい。

W・R 大きな違いは、他のスポーツは自然を相手に闘わないことよ。

W・K 僕は山を相手に闘わない／

W・R “闘う”のじゃないの。ボクサーは他人に対して己れを位置づけるでしょ。自然に対してじゃない。私はバレーボールやレースもしたわ。然し、それらはいずれも人と接触しているのよ。と



ころがアルピニズムの根本的な論拠は、山との接触であって、人ではないと云う事よ。

D・S ダンスみたいなものだ。誰も部屋の端から端まで走るためにダンスには行かない。音楽を踊るために、喜びのために踊る。世界一のダンサーになるためじゃない。1日でブロード・ピークをやっつける者のように記録に盲目的になっては、どうやって自然の真価を認められよう。それは畏だ。

山やは何を売るべきか

—— どうやら皆さんは大変なロマンチストのようですね。いつも皆さんの彼の地からはお金の話が舞込んでくるのですが……然し、ひと度、ヒマラヤへ行かれるとどうなんですか。

D・S 我々は皆、経験のために行く。そして特別な理由で登って行く／ガイドやシェルパは彼らの村で静かに働いている。然し、彼らもまた頂上に向って出かけようとする。何故だろう。ただ金のためだけではないようだ。

E・L 困難さや危険にもかかわらず山に引かれる。あるいはそれ故に引かれるのかも知れない。

P・B アルピニストは大変なシャイなんだ(笑い) 人は私たちの印象を余りに語らない。書く事はするが語らない。それぞれ皆は何かを持っている…

R・M 一方では純粋な活動の面があり、他方では

表現の面がある。僕は自分の経験を文字に書き換えることが出来る。ある時は作家であり、映画を作ればシネマスターになり、登山家ではなくなる。僕は平生、山で起ることや僕をかりたてるものが何んであるかを大衆に云いたくてフィルムを廻すことにしている。然し、する事と話す事は分けなくてはならない。

W・K 若し君が本当に君の感じるものを表現するなら、我々は非常に自己中心的な人物になろう。どの点で我々が売ることに誠実であるかと云うのは難しい事だ。

R・M そんなことは非常にたやすいことだ。君が何を売りたいくて、何を自分に残しておきたいかを知るの君だけだ。

W・K 然し、良いものとそうでないものとを区別することは、いつも易しい事ではない。

R・M 若し、君がそうすべきでないものを売るとしたら、君は気まずくなるだろう。そしたらやめることだ。我々は皆、生きるためには何かを売らなければならない。そして我々は多くの事が出来るのである。生きるため、あるいは自分の遠征費用のために僕は自分を犠牲にしたものを売ってきて少しも問題はなかった。ましてや、僕は自分の出来る僅かな部分しか売っていない。

W・K 他に比べ好きになれないやり方だ。

D・S 67年にシャモニーのプラン北壁で我々は2つの死体に出遭い、私は写真を撮った。ジャーナリストがこの話を聞いて譲ってくれと云うので、危く私はそれを売るところだった。友達が私をうまく引き止めてくれた御陰で私には良かったが、スクープとしては残念だった。

R・M 山の真実の姿もまた見せるべきだ。

D・S “ブンデ”誌に発表した君がクレバスから引き上げたニュージーランド人の写真。僕はその家族と友人達に会ったよ、彼らはあの写真にショックを受けていた。

R・M どうして嘘を売らなきゃいけないんだ？山は危険さ、死人もでる。それらを見せる勇気を持つ必要もある。

W・R 山に於けるポルノな面だわ。

W・K 現実を見せるとの口実のもとに、強いて金を求める必要はない。

—— プレスを無視すべきですか？

D・S 無理だ。

R・M 考慮に入れるべきだが、さして重要でもない。

P・B 他の世界と良き関係を持つ事は必要だ。

W・K 伝達するための唯一の方法だよ。アルピニズムにおける重要な事が説明されたり、自分やエゴを語るためにも必要だ。

R・M 誰が自分を表現できると云うんだ、若し、それが君のエゴでないと云うなら自分の存在を示すのにもっと良いのは表現だ。ヘミングウェイやトルストイのような人は己れの奥底まで探った。偉大な書物は、そうして出来ている。

D・S 君によると印象づけることと表現すること（否、言葉の遊び）の選択がある。テレーやディーンベルガーは山で感じたことを単に他の人達とわかちあうために伝えた。それは、読者に“印象づける”ためではなかった。

W・R ボナッティもそうよ。

W・K エゴは現代の最も質の悪い病だ。自分を見失い、それしか考えない。私にはエゴの売却が感じられる。

R・M 売却は後にくる。君だって表現する必要を深く感じるから、それを売り、与え、恰てるのではないのか、そんなこと表現とはなにも関係ない。いずれにせよ君が山で感じ取る感動は、君が感じるもので、君自身の感動は君にしか語れない。

W・K 思い違いがある。もし君が君の深い感情を語るなら、僕はそれをエゴを表現しているとは云わない。エゴと云うものは君自身の価値や勢力への感情であると云っておきたい。

R・M それは間違ったエゴの概念だ。8,000m峰をやりたいと云うのに否定的な者は誰もいない。

W・K 若し、君が君のエゴに支配されてない限りはの話だ。

R・M 幸いなことに僕は僕のエゴにも君のエゴにも（笑い）支配されていない。

W・K 僕は、僕を包む世界へ調和的に入り込み、そして合体したいと願っているが、自分のエゴの目覚めがそれを邪魔し、世界と自分の存在の障害になっている。

R・M 君は世界を理想でみている。僕は理想主義

は嫌いだ。理想主義はアルピニズムを完全に失墜させた。ヒトラーはドイツ人を支配下に置くのにそれを使った。

W・R 自分のエゴを表現して何ら悪いことはないと思うわ。他の者達のエゴを忘れない限りね。

R・M 然し、他人の感情を表わすのは難しい。

W・K 僕はラインホルトに全てにおいて余りにも心を傷つけられて、自分がどうして良いのか判らなくなった。(笑い)

今後の8千米峰登山は

—— 8,000m峰登山に関して、皆さんは将来はテクニック面が問われるとおっしゃれましたが、どんなチャレンジが残こされていますか。

D・S K2西壁

W・K ローツェ・シャールの中央ピーク

P・B ジャヌー北壁の直登

R・M 大変難しくて危険だが、本当の北壁で非常に寒く、6,800~7,700mの間にチマオヴェストのような900mもの壁

W・K アルパイン・スタイルでならアルプスでもファンタスティックなルートと同じ位のものです。然し、20人で試みるのなら話は違ってくる。新ルートは大遠征隊には禁止すべきである。

R・M ローツェからエベレストへアルパイン・スタイルでのトラバースは？

W・K 私は易しいルートを辿ってトラバースするよりはローツェ南壁の方が好しい。

R・M 唯一論理的な方法は、南壁あるいは南東稜からだ。

—— 登攀テクニックの面からはどうでしょうか。

W・K マカルー西壁

P・B カンチェンジュンガの全ての頂上の縦走

E・L Ogre 西壁

D・S 壮大なのは、K2西壁を冬期、ソロで而も靴なしで……(笑い)

W・K 真夜中に……

D・S ボクサー用のグローブで……

W・K アルパイン・スタイルで冬期2~3人あるいはソロでなら8,000m峰の新ルートを検討するべきだ。ククチカによれば、ダウラギリやアンナプルナ山群では冬にかなりの降雪がかなりある

にもかかわらず、風が殆どなくとても静かな日があるらしい。

W・R フランス人が試みたK2南西稜なんかは素晴らしいわ。

D・S 確かに今日までではK2の最も美しいルートだ。

R・M アルパイン・テクニックで出来るかな？

—— カサロットは先日私に来年やると云っていた。

R・M 絶対出来ないよ。

P・B マカルー西稜が最も難しいと思うよ。

—— エベレストには何が残っているでしょう。ローツェからのトラバースを除いて。

D・S エベレストの西稜からローツェ、又ブツェと辿る馬蹄形縦走も語られている。

R・M ソロか2人で一方から登って他方へ下ることも考えられる。

E・L 私には西南壁に興味ある。

P・B ボードマンとタスカーが消えた東稜なんか大変興味深い。さもないと冬期の西稜だ。

E・E それはコンデションの問題だ。

P・B アメリカ隊に成された東壁は？

R・M 危険でもあるが素晴らしい。でもそう成されてしまった。

—— エリック、君は“デルタ”を使ってジョラスの連続登攀をしたけど、“デルタ”や“パラバウント”なんかの新しいものをヒマラヤに持ち込もうと考えるかい。

E・E 時間を稼ぐ事は出来るが、たいして重要じゃない。8,000m峰を2つ24時間では出来ない。

P・B 全体に条件次第と云ったところだ。晴れた風のない条件が必要だ。

W・K “デルタ”より危険は少ないのかい。

P・B “パラバウント”が開かないとしたら離陸の時、危ないだけだ。

R・M 若し、ひどい風が起ったらどうなるんだい？

P・B 一旦、飛びたてば全く問題はない。

W・K ソ連のパラシューターが、レーニン峰から降下したのを聞いたことがある。

W・R 10人中4人が中腹にぶつかったようよ。

D・S 悪い確率だ……

R・M ピエール、明日、城壁から飛んでいいよ。

P・B おーそんなに急ぐなよ。ケーブルがないのを確かめなきゃならん。

R・M 勿論、ヒマラヤではその危険はない。恐らく下降には最も優れたシステムだろう。持ち運びも最も手軽だ。強いて云えば面倒なのは、エベレストの頂上で3日間も好天を待てないことだ。

W・K でも冬なら完全だ。

R・M ウン、君はそのままヨーロッパに直接着地できるだろうよ！

W・K あるいは頂上から頂上へと飛んだりして！

遠征資金は

—— 経済問題に戻ろう。ポーランドではどうですか、確かカラビナ1個が15日分の給料に匹敵するとか云ってましたが。

W・K その点については説明出来ないよ。僕は投獄されてしまう！僕らは幾らかの補助金を主にズロチ^{*1}で貰っている。外貨ではそんなにない。昨年、3つの優秀なチームが5000ズロチを3つに分けた。僕はその内1600ズロチ貰った。

W・R ポーランドは豊かな国として知られてる訳でもないのに多くの遠征があるわ。システムは簡単で国が食費、交通費それに多少の装備をズロチで支払ってくれるの。残りは約2分の1だけが、遠征隊のメンバーによって支払われるわ。大遠征ともなればクラブの監督下の省から援助を受けます。但し、3年にたった1度だけよ。遠征費は3年のサラリーに値するわ。

W・K さもなければザイルを手に入れるだけの労働をする。Clochers工場の煙突掃除の稼ぎはいいよ。

—— イギリスでは？

D・S 純粋な収入を除けば、エベレスト財団から補助金がある。53年の初登頂の映画や本の収益がBMCによって投資され、その利息のお陰でこれまでに50ちかい小さな遠征隊が補助金を受けている。500～1,500ポンドにわたって大きくはないが給付されている。

R・M その金はクレイジー・ホース・サロンの金よりもなにかにおうね、それだったら売女にスポンサーにでもなって貰った方がましだね！

W・K 君がファシスト党に名を売らない限りはね

R・M なんであろうと政府にはだ。

W・K そんな訳でポーランド登山家の姿がテレビから消えた……

W・R ボイコットがありまして……

R・M 若し、フランスで君達がミッテランに反対しながら国の補助金を受けているとしたら、「俺は奴の金を取った。でも彼は好きじゃない。」と君達は云えるかい。(笑い)

P・B この場合、ちょっとした公務員だね……

D・S 僕にはこのエベレスト財団に関する論争が判らない。金はアルピニスト達から出るものだ。基金が減ったら僕らは講演、その他を開く。これがアルピニズムが政治のシミをつけるのを避けるためにはもってこの運びだよ。

R・M 君は政府の金に手をつけた瞬間、政治に巻き込まれるんだ。

W・K 政府の金は市民のものだ、若し、社会を豊かにするような価値のある行為をするなら、その社会が送るものを拒む理由はない。それに対して若し、政府が我々の行動を例えば、宣伝機関のように利用するなら……

R・M ヒットラーのようにどうして奴がアイガー北壁に金を出すと思う、宣伝機関だよ！

W・K そんなに怒鳴るなよ。安心しろ僕はヒットラーではない。

—— 最後に偉大な岳人として、どんな方が思い起こされますか。

D・S リオネル・テレイ

W・K ティッヒー、シプトン

E・L ブール、マンメリー

P・B ノートン及び全てのエベレスト開拓者達。

E・E 歴史については良く知らないが、多分ノートン。

R・M マンメリー、リオネル・テレイ

W・R ディーンベルガー、彼はブロード・ピークのアルパイン・スタイルの先駆者だったわ、その彼が20年経ってまた戻ってきたのよ。

(フランスの「VERTICAL」誌4号(1985年12月・1986年2月合併)より抄訳)

(訳：杉岡雄二、構成：尾形好雄)

(*1: 1 US \$ = 164.83 Zlotys, 1986年5月3日現在)

地域ニュース

《 中 国 》

春の登山隊、初登頂相次ぐ

・チョモランマ（8,848m）

西稜からの登頂を目指していたカナダ隊（18名）のシャロン・ウッド、ドワイン・コンドン両隊員は5月16日、中国人以外の女性として初めて同峰の登頂に成功した。

同峰には1975年にチベット族女性の潘多が北西稜からの登頂に成功している。

・クーラ・カンリ（7,554m）初登頂

同峰の初登頂を目指していた神戸大学隊（平井一正隊長以下25名）は、3月17日に同峰北面にB・C（4,400m）を設営した後、4月21日と22日の両日にわたって初登頂に成功した。

21日の登頂者は、大谷映芳（39）、居谷千春（36）、坂本淳（29）、尾崎久純（28）の4名。22日は、森長敬（32）、長谷川浩（27）の両名。

・チャンツェ（7,553m）

チョモランマに隣接して聳える同峰に挑んでいた長野山岳協会と中国の合同登山隊（日本側は堀内利美隊長以下17名）は、4月23日に中央ロンブク氷河の5,200地上にB・Cを設営した後、5月10日に16名、11日に13名がそれぞれ登頂に成功した。

・ニエンチェンタングラ（7,162m）初登頂

同峰の初登頂を目指していた東北大学隊（葛西森夫隊長以下11名）は、悪天候のためアタックが遅れていたが、5月8日に初登頂に成功した。登頂者は、長沼宏（32）、丸山裕介（27）、和田道治（25）の3隊員。

尚、同隊の学術交流団に参加していた国立公衆衛生院名誉教授山県登氏（66）は、5月4日にシガツェの宿泊先で死亡した。死因は高度障害による心不全ではないかとみられている。

・ニンチンカンサ（7,191m）初登頂

中国のチベット登山協会は、昨年、大分岳連隊が挑んで失敗した同峰へ登山隊を派遣し、初登頂に成功した。同隊はB・C（5,000m）建設後、C 1

（6,100m）、C 2（6,700m）の2つの前進キャンプを設け、4月28日に初登頂に成功した。（別頁、「躍進めざましいチベット登山協会」を参照されたい。）

《 ネパール 》

春の日本隊、エベレストは断念

・サガルマータ（エベレスト、8,848m）

東南稜からの無酸素登頂を目指した東京イエティ同人隊（遠藤晴行隊長以下5名）は、5月10日8,600m地点で登頂を断念した。

・ローツェ（8,516m）

ベルニナ山岳会隊（福島正明隊長以下8名）は西面の初登ルートから挑み、登頂に成功した。同隊は、3月31日にB・Cを建設した後、4月13日にC 1、25日C 2とキャンプを進め5月4日に登頂した。登頂者は福島隊長（35）と春木俊秀（24）の2名。

・ランタン・リルン（7,234m）

南東稜からの登頂を目指した大谷ヒマラヤ山岳会隊（沼賢亮隊長以下9名）は、5月3日に多賀敬佳、多田知治、福井俊之、竹内隆の4隊員が登頂に成功した。

《 パキスタン 》

クンジェラブ峠へ第1陣

長い間、外国人には門戸を閉ざしてきたシルクロード要衝の地、クンジェラブ峠（4,934m）が5月1日から外国人にオープンされた。パキスタン側からの第1陣は、約120人の観光客が1日、バス4台で雪が残る峠を越えた。

クンジェラブ峠は、パキスタンのタコートを起点とするカラコルム・ハイウェイ 645kmの終点だが、同時にカシュガルからイスラマバードを結ぶ“新シルクロード”の中間地点でもある。

中国側からは、カシュガルからタシュクルガン（3,600m）まで中・パ友好道路を360km南下し、そこからさらに90km車で走ると国境のチェック・ポストのあるピラリに着く。

トピックス

理事会報告

一昭和61年度理事会開催一

5月24日に昭和61年度の理事会が開催されましたので、以下に報告致します。

日時 昭和61年5月24日(土)10時～12時

会場 大正セントラルホテル会場

出席者 遠藤登、稲田定重、阿部淳、山森欣一、
八木原絬明、内田嘉弘、尾形好雄(以上
本人出席)

小島守夫、飛田和夫、岩水龍峰、小林英
見、新貝勲(以上委任)

議事 遠藤副会長を議長に選出して以下の議事
に入った。

- 1) 昭和60年度事業報告について
山森事務局長より各事業概要の報告があり
了承された。
- 2) 昭和60年度会計収支決算について
山森事務局長より60年度の一般会計、基
本財産会計、別途会計、ヒマラヤ研究所
会計、及び財務諸表について報告があり
了承された。
- 3) 昭和61年度の事業計画と収支予算につ
いて
山森事務局長より61年度の事業計画とそ
れに伴う収支予算について説明があり、
承認された。
- 4) 役員の補充について
角田不二常務理事死亡による理事の欠員
については60年度の理事会で常務理事会
に選任を一任することで了承されていた
が、常務理事会から新常務理事に山田昇
氏が推挙され承認された。
- 5) 除外対象者の承認
再三の督促に応じなかった会費未納者、
35名の除名承認
- 6) 新入会員の承認
新入会員の承認は従来通り事務局に一任

させてほしい旨の提案がなされ承認。60
年度新入会員57名全員について事後承認。

- 7) 20周年記念事業検討委員会の設置につ
いて
来年度の20周年を前に標記について稲田
専務理事より提案説明があり、設置する
ことで了承。準備委員会のメンバーとし
ては、専務理事、事務局員、阿部淳理事、
沖允人、西郡光昭会員が選出された。
- 8) 62年度の長江流域登山計画について
1山づつブロック別に担当してはどうか
の提案があり、その方向で推進すること
が了承された。

テンジン氏死去

エベレストの初登頂者、テンジン・ノルゲイ氏は
5月9日、自宅のあるダージリンで肺疾患のため
死去した。72歳だった。同氏は昨年1月、ニュー
デリーの病院で治療を受けたが、その後も経過は
思わしくなかった。

エベレスト山麓のシェルパ族出身の同氏は1953
年5月29日、英国隊(J・ハント隊長)のエドモン
ド・ヒラリー氏と共にエベレストの初登頂に成功
し、一躍、ヒマラヤの英雄となった。この偉業を
記念して、翌年、故ネール首相の提唱でダージリ
ンにインド国立登山学校(H.M.I)が創設され、
その校長として1976年まで若いアルピニストの指
導、育成に貢献した。

トランゴ・タワー壮行会開催

日ポ合同隊(日本側山田昇隊長以下3名)の壮
行会が、5月13日に高田馬場の居酒屋で開かれた。
会場には関係者が約30名参会し賑わいだ。

インフォメーション

山里寿男・チベットの画展

山里画伯の山の画展が下記の通り開催されます。

日時 6月27日(金)～7月2日(水)

会場 銀座松屋デパート7階画廊

躍進めざましいチベット登山協会

チベット登山協会隊は4月28日ニンチンカンサ峰(7,191m)の初登頂に成功した。中国隊が単独チームで7,000mの高峰の初登頂に成功したのは1977年の中ソ国境のトムール峰(7,443m)1983年ナイプン峰(7,043m)以来の快挙である。

チベット登山協会は昨年創立20周年を迎え、これを記念して、独力でチョー・オユー峰(8,201m)の頂上に9人を立たせ実力の片鱗を見せていた。この登山はチベット自治区成立20周年の目玉として北京の中央政府も重視し、中国登山協会委員の張俊岩氏を登山隊顧問として送り込んでいた。

チベット人の登山は、1960年チョモランマ登山訓練のために実施された1959年のムスターグ・アタ峰登頂から始まり、それ以後中国隊の一員として多くの成果を挙げていたが、それはあくまでも漢族の指導によるものであったと云えるであろう。

1980年中国は新たに外国人に高峰を開放したが、この時にチョモランマやシジャパンマ登山の縁の下で力持ち(高所協力員と云う名の下に)として活躍したのが、チベットの若者達であった。

この頃からチベット登山協会では、独自のチームによる自国の高峰登山を考えるようになった。

力を蓄え、訓練する方法は幾つかあった。外国登山隊の高所協力員としての立場としては、主として高所への訓練となった。日山協(主管・長野県山岳協会)との合同登山技術訓練や、HAJが1983年に派遣したナムチャ・バルワ峰…… 隊員への技術訓練は主として登山技術や岩登り技術の取得となった。

こうした訓練と併行して、1983年84年のナムチャ・バルワ峰登山における、ナイプン峰登頂を経て'85年のチョー・オユー登頂。日中合同ナムナニ峰登頂の実績を踏えての今回のニンチンカンサ峰初登頂であった。

チベット登山協会では、本年章子峰(7,538m)に日山協と合同で技術訓練を実施中であるし、来年はHAJと合同でラプチェ・カン峰(7,367m)を登山する。又、再び別ルートからのナムチャ・バルワ峰を試み、羌塘高原の罗布峰(7,095m)も単

独チームで登る予定であり、1988年に予定されている日本・中国・ネパール三国によるチョモランマ縦走計画の中国側隊の主力となる予定である。

確実に力を養成してきたチベット登山協会隊の高所登山は今後多に期待されるところである。

尚、ニンチンカンサ峰の登頂者は次のとおり。

- ①桑珠(1975・チョモランマ登頂者)
- ②辺巴(1985・チョー・オユー登頂者)
- ③加布(1981・シジャパンマ・1985ナムナニ登頂者)
- ④拉旺(1985・チョー・オユー登頂者)
- ⑤丹真多吉(1985・チョー・オユー登頂者)
- ⑥格桑(1985・チョー・オユー登頂者)
- ⑦旺多 ⑧旦增 ⑨加措 ⑩辺巴扎西 ⑪次仁
- ⑫普布

BC 5,000m C1 6,100m C2 6,700m

※中国の8,000m峰登頂者

王富州(1960・チョモランマ、1964シジャパンマ、1958・レーニン、1959・ムスターグ・アタ)
仁青平措(1981・シジャパンマ、1985チョー・オユー、1983、84・ナイプン)

許兢(1964・シジャパンマ、1956、59ムスターグ・アタ)
桑珠(1975・チョモランマ、1977・トムール、1986・ニンチンカンサ)

屈銀華(1960・チョモランマ、1958・レーニン、1959・ムスターグ・アタ)

加布(1981・シジャパンマ、1985・ナムナニ、1986・ニンチンカンサ)

辺巴(1985・チョー・オユー、1977・トムール、1986・ニンチンカンサ)

貢布、貢嘎巴桑、張俊岩、多吉、米馬扎西、索南多吉、拉旺、丹真多吉、格桑(以上は7,000m峰も登頂している人)侯生福、次仁多吉、大平措、阿布欽、羅則、索南罗布(以上チョモランマ)大多布吉、小多布吉、次仁、旺加(以上チョー・オユー)成天亮、雲登、鄔宗岳、陳三、(以上シジャパンマ)

(記録は1986年4月30日現在)

(山森欣一)

昭和61年度

日本ヒマラヤ協会通常総会報告

昭和61年度の本会総会は、高田馬場の大正セントラルホテルで行われ、次のような経緯で無事終了しましたのでご報告致します。

1. 日 時 昭和61年 5月24日（土）
午後1時～2時20分
 2. 会 場 大正セントラルホテル会議室
東京都新宿区高田馬場 1-27-7
 3. 出席者 本人出席：遠藤登（副会長）、稲田定重（専務理事）、山森欣一、八木原罔明、尾形好雄（以上常務理事）
阿部淳、植松秀之、小林英見、内田嘉弘（以上理事）、土居正勝（監事）
出口當、黒沢文代、高橋史郎（以上東京）、笹岡慎司（埼玉）、中岡久、丸山寛子（茨城）、細海昭二（千葉）
福山佑、星野貢（以上神奈川）
以上19名、委任状提出者199名。
計218名。（定款第25条の規定により3分の1以上の出席者により成立。
3月31日現在の会員総数は614名なので、定足数は205名）
 4. 次 第
 - 1) 開 会
柴田会長に代って遠藤登副会長が開会を宣し、挨拶を行う。
次いで、議長には定款の定めるところにより遠藤副会長があたり、書記に尾形好雄（事務局職員）議事録署名人に八木原罔明氏、中岡久氏を選んで議事に入った。
 - 2) 議 事
議案各号に関して山森事務局長より説明がなされ質疑に入った。
 - ①議案第1号 昭和60年度事業報告について
別紙報告を異議なく承認された。
 - ②議案第2号 昭和60年度収支決算及び財産目録の報告について（併せて土居監事より、適正な会計収支報告である旨の監査報告あり）
別紙報告を異議なく承認された。
 - ③議案第3号 昭和61年度事業計画について
別紙計画について異議なく承認された。
 - ④議案第4号 昭和61年度収支予算について
別紙予算について異議なく承認された。
 - ⑤議案第5号 役員の補充について
常務理事1名補充について、常務理事会から山田昇氏を選任した旨の報告あり。（60年度総会で選任は常務理事会に一任と云う事で承認されていた。）
 - ⑥議案第6号 会員の除名について
定款第8条に従って、会費滞納の会員35名が除名対象者として提案された。
再三の督促にも応じない35名の除名は異議なく承認された。
尚、これら除名者については、年会費を納入すれば（入会金は不要）いつでも復会できる救済措置が取られているので、知りあいの除名者がいたら声をかけてやってほしいと、事務局よりのお願があった。
 - ⑦議案第7号 緊急議案として20周年記念事業検討委員会の設立について稲田専務理事より提案がなされた。
異議なく承認された。
- 以上を以って昭和61年度の通常総会は終了。
（閉会 14時20分）

昭和60年度事業報告

自 昭和60年4月1日

至 昭和61年3月31日

I 定款第4条第1項にもとづく事業（ヒマラヤに関する総合的な資料と情報の収集・整理・保存及び、それらの利用希望者に対する便宜供与）

1. 情報管理事業

- 1) 会員内外に対する情報提供とトレッキング・踏査・登山計画の企画・研究等の指導。

年間500件を越す電話による問い合わせと100件を越える事務所への来訪者へ情報提供と指導を実施した。

- 2) 文献・資料のレファレンスサービス
一般的に入手しづらいものに限定してサービスを実施した。ヒマラヤ諸国の登山規則等に関する希望者が多い。

2. 日本ヒマラヤ研究所設置事業

調査・研究の一部分を実施し、体制づくりに着手した。

II 定款第4条第2項にもとづく事業（登山をはじめとする野外活動と関連する諸分野に関する研究活動と成果の公表）

1. 調査研究事業

- 1) 専門研究会活動の見直し
地域を限定して研究する専門研については、ワハン等特殊なものを除き廃止する方向を検討した。
- 2) 高所登山における事故防止に関する調査研究
続発する高所登山の事故を分析し、事故防止のために研究成果を「ヒマラヤ」172号に発表し、また、東京都山岳連盟主催・高所順応研究会を通して発表した。
- 3) 高所登山に対する意識調査
今後の調査事項・方法について検討した。

2. 出版事業（研究・報告）

- 1) マモストーン・カンリ隊報告書の発行（6月）

- 2) ガンケル・プンスム隊報告書の発行（12月）
- 3) ギャラ・ペリ偵察隊報告書の発行（3月）
- 4) ジチュダケ隊報告書の発行準備
- 5) 崑崙・八花氷山隊報告書の発行準備
- 6) K2隊報告書の発行準備
- 7) 「ヒマラヤ」英文ダイジェスト版の発行（158号～166号）

3. 関連学術事業

ブータン、中国へ派遣する予定であったが許可取得できず中止した。

III 定款第4条第3項にもとづく事業（ヒマラヤへの登山をはじめとする野外活動・研究・調査等の団体の派遣）

1. 高所登山事業

- 1) 青藏高原探検隊の派遣

5月23日～7月21日に八木原罔明隊長以下8名及び同行取材班9名を派遣。黄河源流域の雅拉達尼山、巴顔喀拉山、他の登頂及び黄河源流域の探検を果す。

- 2) K2（8,611m）登山隊の派遣

5月15日～8月31日に飛田和夫隊長以下16名を派遣。7月24日、南東稜から3名が登頂した。

- 3) ムズターグ（6,638m）登山隊の派遣

7月26日～9月8日に中国登山協会との合同隊として、森美枝子隊長以下5名を派遣。事前の資料不足と日程不足によりムズターグは断念し、隣接する無名峰（5,850m）に8月25日と27日の両日にわたって8名（内、中国人2名）が初登頂。「八花氷山」と命名する。

- 4) サセル・カンリⅡ（7,518m）登山隊の派遣

7月14日～9月25日にインド登山団体との合同隊として、沖允人隊長以下5名を派遣。9月7日に西面から北西稜を経て4名（インド人）が初登頂した。

- 5) ガンケル・プンスム（7,541m）登山隊の派遣

8月14日～10月26日に大内倫文隊長以下10名を派遣。中央稜から挑んだが6,800

mで断念。

- 6) クラウン (7,295m) 登山隊の派遣
8月16日～10月29日に館野秀夫隊長以下
11名を派遣。東壁から挑んだが6,300m
で断念。
- 7) ギャラ・ペリ (7,151m) 偵察隊の派遣
9月10日～10月24日に山森欣一隊長以下
2名を派遣。’86年の本隊派遣に向けて南
西面の偵察を行った。
- 8) 直轄プロジェクトの推進
 - イ) 昭和61年度「雪宝頂(5,588m)」登山
夏の登山実施に向けて本格的に隊を構
成(遠藤登隊長以下11名)した。
 - ロ) 昭和61年度「ギャラ・ペリ (7,151m)」
登山
秋の登山実施に向けて本格的に隊を構
成(飛田和夫隊長以下6名)した。
 - ハ) 昭和61年度「チョー・アウィ(7,354m)」
登山
秋の登山実施に向けて本格的に隊を構
成(八嶋寛隊長以下10名)した。
 - ニ) 昭和61年度「カルジャン (7,221m)」
登山
秋の登山実施に向けて本格的に隊を構
成(新郷信廣隊長以下7名)した。
 - ホ) 昭和61年度「キンナール・カイラス
(6,473m)」登山
夏から秋の登山実施に向けて本格的に
隊を構成(寺沢玲子隊長以下5名)し
た。
 - ヘ) 昭和61年度「ガンケル・プンスム
(7,541m)」登山
秋の登山実施に向けて本格的に隊を構
成(尾形好雄隊長以下3名)した。
 - ト) 昭和61年度「ラブチェ・カン(7,367m)」
偵察
秋の偵察隊派遣に向けて本格的に隊を
構成(山森欣一隊長以下2名)した。
 - チ) 昭和62年度本会創立20周年記念登山と
旅遊
実施候補の許可取得に着手し、一部準
備活動を開始した。

9) 昭和61年度実施隊の準備(直轄隊を除く)

- イ) トランゴ・タワー (6,251m) 登山
ポーランドの合同隊として山田昇隊長
以下3名(日本側)で実施。
 - 10) 登山許可申請と取得
魅力あるヒマラヤの高峰について、各国
に対して前年に引き続き許可申請を行っ
た。
 - 11) 地域登山計画の推進
各地域会員を主体とした登山隊派遣につ
いて、各地域会員との懇談を進め一部実
施候補の許可取得と準備活動を開始した。
 - 12) 壮年登山隊計画の推進
壮年会員を中心とした登山隊の実現を目
指して検討した。
- ## 2. 野外活動事業
- 1) 中ネ辺境踏査隊の派遣
8月2日～8月28日に中江啓介隊長以下
7名を、西寧から青蔵公路を経てラサ〜
カトマンズへ抜ける山地旅遊に派遣。
(H A J主催、西遊旅行社主管)
 - 2) その他、ヒマラヤ各国の魅力ある地域へ
の踏査・トレッキング隊の派遣について
企画準備を行い、一部許可申請を行った。
- ## IV 定款第4条第4項に基づく事業(機関誌、そ の他の刊行物、登山・野外活動、研修・各種 の会合によるこの分野の健全な発達を図るた めの指導・啓蒙活動)
1. 機関誌発行事業
「ヒマラヤ」162号～173号を毎月発行し
た。(毎号24～28ページ)
 2. 出版事業
 - 1) 年報「HIMALAYA」第3号の発行準備を
行った。
 - 2) ヒマラヤの登山教本の発行準備を行った。
 3. 指導・啓蒙事業
 - 1) 第7回インド・ヒマラヤ会議
IMF副総裁N・D・ジャイアル氏を講
師として、1月11日～12日に東京で開催
した。
 - 2) 中国登山研究会
四川省登山協会を中心とした講師を招聘

し、3月1日に東京で開催した。

3) 定例集会

東京（毎月）及び札幌（隔月）で定例集会を開催した。

4) 日本ヒマラヤ会議

札幌・名古屋・福岡等で開催する予定であったが都合により中止した。

5) 地域ヒマラヤ集会

福岡・広島（11月）、佐賀（2月）で開催し、中国登山の懇談を行った。

6) 高所登山懇談会の開催

有識者による公開討論会を開催する予定であったが都合により中止した。

7) 公式報告会

青蔵高原探検隊（7月）、K2隊（9月）、ギャラ・ペリ偵察隊（10月）、ガンケル・プンスム隊（11月）、クラウン隊（11月）等のスライド及び映画による報告会を東京集会で実施。また、10月15日に日中婦人友好登山隊の報告会を東京・学会会館で開催。

8) 壮行会

各隊について出発約1ヶ月前に行った。計画発表と地域事情伝達。

V 定款第4条第5項にもとづく事業（その他、前条の目的を達成するために必要と認める事業）

1. 国際交流事業

1) 外国代表の招請

イ) インド登山財団副総裁N・D・ジャイアル氏を1月11日～18日まで招請し、歓迎会及び研究会を開催した。

ロ) 中国登山協会と四川省登山協会から成る代表团（鄭栄発団長以下4名）を2月27日～3月4日まで招請し、歓迎会及び研究会を開催した。

2) 代表派遣

イ) 中国登山協会へ派遣

4月～稲田専務理事・八木原専務理事・館野クラウン隊長、6月～稲田専務理事・山森専務理事、9月～稲田専務理事、12月～稲田専務理事・山森専務

理事、3月～稲田専務理事・尾形専務理事を派遣し登山許可その他について協議した。

ロ) 第三回ヒマラヤ登山観光会議（インド・ダージリン）

沖允人サセル・カンリⅡ隊長を派遣した。（5月）

3) 来日したヒマラヤ諸国の関係者との懇親

イ) 中国登山協会史占春副主席と懇談（8月）

ロ) 中国登山協会許競副主席・西藏登山協会貢布副主席と懇親（8月）

ハ) 中国登山協会史占春副主席と懇談（11月）

ニ) インド・ラジブ・ガンジー首相と懇親（11月）

ホ) ブータン外相・ロンボ・ダワ・ツェリン氏と懇親（3月）

4) インド登山財団の人工岩場建設への協力
IMFが建設を希望している人工岩場について、国内で予備調査を行い種々の建設準備資料を提供した。

2. 国内関係団体との協同

（社）日本山岳協会、その他関係団体と事業提携・協力・情報交換等を行った。

3. 組織の整備

1) 社団法人化の推進……当局へ引き続き依頼

2) 基本財産の充実……引き続き拠出金・寄附金等により推進。

3) 執行体制の強化……本部近郊会員の協力を得て、非常勤スタッフを育成強化。

4) 会員拡大の強化……イ) 新規会員の募集を実施するも目標に達せず。

ロ) 終身会員への働きかけにより60年度は6名獲得。

ハ) 賛助会員の獲得。

ニ) 国外会員の拡大。

5) 会費未納の一扫

6) 地域体制の検討……地域体制の確立を地

域集会和合わせて推
進すべく検討を行っ
た。

4. その他

1) 運営諸規程の整備

法人として必要とされるものの整備

2) 事務整備

事務処理方法の合理化と統一。コンピュ
ーター導入の検討を行った。

3) 事故関係

イ) ナンガパルバット事故関係

一周忌にあたり、7月1日～18日にか
けてベース・キャンプ地訪問団（土居
正勝団長以下11名）を派遣。

ナンガパルバット事故報告・追悼集の
発行準備。

ロ) クン三周忌が実家で行われ、山森隊長 以下隊員が出席した。

昭和60年度収支決算書

自 昭和60年4月1日

至 昭和61年3月31日

支出の部

(単位：円)

勘定科目		予算額	決算額	増・減(△)
大科目	中科目			
管理費	給料手当	(9,455,000)	(9,840,212)	(385,212)
	旅費交通費	5,840,000	6,003,834	163,834
	通信運搬費	400,000	100,400	△ 299,600
	電話費	400,000	317,030	△ 82,970
	消耗品・文具費	350,000	391,275	41,275
	印刷製本費	100,000	150,300	50,300
	宮備用品費	50,000	100,000	50,000
	図書費	600,000	958,601	358,601
	貸借料	35,000	85,480	50,480
	光熱水費	1,230,000	1,287,500	57,500
	会議費	150,000	148,780	△ 1,220
	広報費	50,000	27,425	△ 22,575
	雑費	150,000	157,530	7,530
	雑費	100,000	112,057	12,057
事業費	野外活動事業	(96,700,000)	(85,241,925)	(△11,458,075)
	高所登山事業	100,000	7,053,987	6,953,987
	指導啓蒙事業	91,000,000	67,941,912	△23,058,088
	機関誌発行事業	400,000	163,126	△ 236,874
	出版事業	2,300,000	2,576,951	276,951
	国際交流事業	400,000	260,000	△ 140,000
	その他事業	2,500,000	2,231,016	△ 268,984
	その他事業	0	5,014,933	5,014,933
次期繰越		(4,853)	(3,315)	(1,538)
次期繰越		4,853	3,315	1,538
合 計		106,159,853	95,085,452	△11,074,401

I 一般会計

収入の部

(単位：円)

勘定科目		予算額	決算額	増・減(△)
大科目	中科目			
入会金収入		(500,000)	(285,000)	(△ 215,000)
	入会金収入	500,000	285,000	△ 215,000
会費収入		(3,800,000)	(3,452,500)	(△ 347,500)
	通常会員会費	3,600,000	3,452,500	△ 147,500
	賛助会員会費	200,000	0	△ 200,000
事業収入		(101,700,000)	(90,924,119)	(△10,775,881)
	野外活動事業	500,000	7,064,211	6,564,211
	高所登山事業	97,000,000	75,608,782	△21,391,218
	指導啓蒙事業	100,000	211,760	111,760
	機関誌発行事業	800,000	819,890	19,890
	出版事業	300,000	219,476	△ 80,524
	国際交流事業	3,000,000	2,060,000	△ 940,000
	その他事業	0	4,940,000	4,940,000
雑収入		(150,000)	(413,980)	(263,980)
	受取利息収入	50,000	79,980	29,980
	その他雑収入	100,000	334,000	234,000
前期繰越		(9,853)	(9,853)	(0)
前期繰越		9,853	9,853	0
合 計		106,159,853	95,085,452	(△11,074,401)

II 基本財産会計

収入の部

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
運用利息	120,000	132,230	12,230
終身会費収入	750,000	900,000	150,000
前期繰越	5,118,416	5,118,416	0
合 計	5,988,416	6,150,646	162,230

支出の部

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
次期繰越	5,988,416	6,150,646	162,230
合 計	5,988,416	6,150,646	162,230

Ⅲ 別途会計

収入の部

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
賛助金	3,000,000	0	△ 3,000,000
別途利息	7,000	8,910	1,910
前期繰越	225,898	225,898	0
合 計	3,232,898	234,808	△ 2,998,090

支出の部

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
借入金返済	3,000,000	0	△ 3,000,000
次期繰越	232,898	234,808	1,910
合 計	3,232,898	234,808	△ 2,998,090

Ⅳ ヒマラヤ研究所会計

収入の部

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
調査研究収入	3,000,000	2,000,000	△ 1,000,000
合 計	3,000,000	2,000,000	△ 1,000,000

支出の部

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
管理費	2,500,000	2,000,000	△ 500,000
調査費	500,000	0	△ 500,000
合 計	3,000,000	2,000,000	△ 1,000,000

貸借対照表

(昭和61年3月31日現在)

借 方		貸 方	
科 目	金 額(円)	科 目	金 額(円)
現金	60,968	未払金	100,000
普通預金	3,384,944	預り金	66,000
郵便振替	213,553	前受金	2,472,477
金銭信託	2,945,940	借入金	5,928,022
未収金	727,250	基本財産	6,150,646
敷金	320,000	別途積立金	234,808
電話加入権	80,300	次期繰越	3,315
備品	1,790,466		
登山装備	5,431,847		
合 計	14,955,268	合 計	14,955,268

Ⅴ 財産目録

(昭和61年3月31日現在、単位：円)

種 別	摘 要	金 額
1. 現金		(60,968)
	手許現金	60,968
2. 普通預金		(3,384,944)
	三菱銀行新宿支店No.4455421	210,026
	第一勧業銀行高田馬場支店No.1099791	2,790,384
	住友信託銀行新宿支店No.5136696	68,591
	東商信用金庫新宿支店No.063468	287,668
	東京銀行新宿支店No.558060	28,275
3. 郵便振替		(213,553)
	東京0-48954	213,553
4. 金銭信託		(2,945,940)
	住友信託銀行新宿支店 127285(1,401,940) 127768(844,000) 127769(500,000) 127770(200,000)	2,945,940
5. 未収金		(727,250)
	終身会員申込者未収金	331,250
	機関誌広告料未収金	396,000
6. 敷金		(320,000)
	淀橋食糧ビル506号敷金	320,000
7. 電話加入権		(80,300)
	03-367-8521	80,300
8. 備品		(1,790,466)
	事務所備品	1,790,466
9. 登山装備		(5,431,847)
	事務所・デポ	2,700,000
	ネパール・デポ	1,117,847
	インド・ブータン・デポ	1,000,000
	中国・デポ	614,000
資産合計		14,955,268
10. 未払金		(100,000)
	柴田金之助	100,000
11. 預り金		(66,000)
	新入会者 6名	66,000
12. 前受金		(2,472,477)
	雪宝頂隊	552,387
	キンナール・カイルス隊	1,241,090
	チョー・ウィ隊	679,000
13. 借入金		(5,928,022)
	柴田金之助	2,000,000
	稲田定重	3,928,022
負債合計		8,566,499
差引正味財産		6,388,769

昭和61年度事業計画

自 昭和61年4月1日
至 昭和62年3月31日

I 定款第4条第1項にもとづく事業（ヒマラヤに関する総合的な資料と情報の収集・整理・保存及びそれらの利用希望者に対する便宜供与）

1. 情報管理事業

「日本ヒマラヤ研究所」の機能と連携しつつ。

- 1) 会員内外に対する情報提供とトレッキング・踏査・登山計画の企画・研究等の指導
- 2) 一般的に入手しづらい文献・資料のレファレンス・サービス

2. 日本ヒマラヤ研究所設置事業

助成金を得て設置し、本会活動の一方の主軸とする。

- 1) 設備充実と運営開始
- 2) 文献調査と調達開始
- 3) 情報管理システム整備と研究方法の策定
- 4) 財務渉外と専任職員配置
助成金導入、年内に研究員の配置を進める。

II 定款第4条第2項にもとづく事業（登山をはじめとする野外活動と関連する諸分野に関する研究活動と成果の公表）

1. 調査研究事業

- 1) 専門研究活動の見直し
- 2) 高所登山における事故防止に関する調査研究
- 3) 高所登山に対する意識調査

2. 出版事業（研究・報告）

- 1) ジチュダケ隊報告書の発行（5月）
- 2) 崑崙・八花氷山隊報告書の発行（6月）
- 3) K2隊報告書の発行（8月）
- 4) 各登山隊報告書の発行準備
- 5) 「ヒマラヤ」英文ダイジェスト版の発行（毎月）

3. 関連学術事業

ブータン、中国へ許可取得次第派遣

III 定款第4条第3項にもとづく事業（ヒマラヤへの登山をはじめとする野外活動・研究・調査等の団体の派遣）

1. 高所登山事業

- 1) トランゴ・タワー（6,251m）合同登山隊の派遣
61年5月19日～7月17日（山田昇隊長以下3名）

- 2) 雪宝頂（5,588m）合同登山隊の派遣
61年7月25日～8月21日（遠藤登隊長以下11名）

- 3) キンナール・カイラス（6,473m）合同登山隊の派遣
61年8月3日～9月27日（寺沢玲子隊長以下5名）

- 4) ギャラ・ベリ（7,151m）登山隊の派遣
61年9月1日～11月21日（飛田和夫隊長以下6名）

- 5) チョー・アウイ（7,354m）登山隊の派遣
61年9月1日～10月31日（八嶋寛隊長以下10名）

- 6) カルジャン（7,221m）登山隊の派遣
61年9月1日～11月2日（新郷信廣隊長以下6名）

- 7) ラプチェ・カン（7,367m）合同偵察隊の派遣
61年9月1日～10月17日（山森欣一隊長以下2名）

- 8) ガンケル・プンスム（7,541m）登山隊の派遣
61年9月3日～10月29日（尾形好雄隊長以下7名）

9) 直轄プロジェクトの推進

- イ) 昭和62年度ラプチェ・カン（7,367m）登山（日中合同）

- ロ) 昭和62年度ガッシャーブルムI（8,068m）登山（中国側）

- ハ) 昭和62年度リモ（7,385m）登山（日印合同）

- ニ) 昭和62年度長江流域登山隊（数峰）

- ホ) 昭和62年度本会創立20周年記念登山と

旅遊（チベット）

10) 登山許可申請と取得

ヒマラヤ各国の魅力ある山々と地域について、登山許可及び入域許可の申請と取得を継続して行う。

11) 地域登山計画の推進

各地域会員を主体とした登山隊派遣について、各地域会員との懇談・調査を進め、その実現を積極的に推進する。

12) 壮年登山隊計画推進

壮年会員を中心とした登山隊の実現を目指して、企画・準備を進める。

2. 野外活動事業

1) 中国・四川省内トレッキング隊の派遣

61年9月～10月

2) その他、ヒマラヤ各国の魅力ある地域への踏査・トレッキング隊の派遣について企画準備を行う。

IV 定款第4条第4項にもとづく事業（機関誌、その他の刊行物、登山・野外活動、研修・各種の会合によるこの分野の健全な発達をはかるための指導・啓蒙活動）

1. 機関誌発行事業

「ヒマラヤ」174号～185号の発行

2. 出版事業

1) 年報「HIMALAYA」第3号の発刊（6月）

2) ヒマラヤ登山教本の発行準備

3. 指導・啓蒙事業

1) 日本ヒマラヤ会議の開催

札幌・山形・仙台等で実施する。

2) 地域ヒマラヤ集会の開催

各地区評議員と打ち合わせて随時開催する。

3) 定例集会

東京（毎月） 札幌（隔月）

4) 中国登山研究会の開催

西藏登山協会代表団を招請して実施する。

5) 第8回インド・ヒマラヤ会議の開催

61年度隊報告と62年度隊計画の検討（講師として、インド登山財団より適任者を招請の予定）

6) 高所登山懇親会の開催

有識者による公開討論会

7) 公式報告会

各登山隊について随時実施する。

8) 壮行会

各隊について計画発表を兼ねて行う。

V 定款第4条第5項にもとづく事業（その他、前条の目的を達成するために必要と認める事業）

1. 国際交流事業

1) 外国代表の招請

イ) インド登山財団より講師適任者を招請し、研究会・歓迎会を開催する（1月）

ロ) 西藏登山協会代表団を招請し、研究会・歓迎会を開催する（11月）

ハ) その他、渉外上必要と認められる代表については慎重に検討の上、随時招請を行う。

2) 代表派遣

イ) 中国登山協会に代表を派遣する。（随時）

ロ) インド・IMF主催「第4回ヒマラヤ登山観光会議」へ代表を派遣する（9月）

ハ) その他、渉外上必要と認められる場合は慎重に検討の上、代表を派遣する。

3) 各ヒマラヤ諸国の登山関係者との交流

イ) 来日したヒマラヤ諸国の登山関係者や在日大使館関係者と懇談する。（随時）

2. 国内関係団体との協調

（社）日本山岳協会、その他関係団体と事業提携・協力・情報交換等を行う。

3. 組織の整備

1) 社団法人化設立許可

早い時期の許可を予定し、当局の指導を得て進める。

2) 基本財産の充実

拠出金・寄附金等により推進して行く。

3) 執行体制の強化

本部近郊会員の協力を得て、非常勤スタッフを育成強化する。

4) 会員拡大の強化

イ) 一般会員の新規加入の一大キャンペー

ンを推進

ロ) 終身会員への強力な働きかけを推進

ハ) 賛助会員の獲得を推進

ニ) 国外会員の拡大を推進

5) 会費未納の一掃

6) 地域体制の検討

4. その他

1) 運営規程の整備

2) 事務整備

事務処理方式の合理化と統一。コンピューター導入の検討。

3) 創立20周年記念事業検討委員会設立
20周年記念事業の検討と準備

4) 事故関係

イ) ナンガパルバット関係

ナンガパルバット事故報告・追悼集の発行(6月)

昭和61年度収支予算書

自 昭和61年4月1日

至 昭和62年3月31日

I 一般会計

収入の部

(単位:円)

勘定科目		予算額	前年度予算額	増・減(△)
大科目	中科目			
入会金収入		(300,000)	(500,000)	(△ 200,000)
	入会金収入	300,000	500,000	△ 200,000
会費収入		(3,060,000)	(3,800,000)	(△ 740,000)
	通常会員会費	3,060,000	3,600,000	△ 540,000
	賛助会員会費	0	200,000	△ 200,000
事業収入		(74,500,000)	(101,700,000)	(△ 27,200,000)
	野外活動事業	0	500,000	△ 500,000
	高所登山事業	70,000,000	97,000,000	△ 27,000,000
	指導啓蒙事業	200,000	100,000	100,000
	機関誌発行事業	800,000	800,000	0
	出版事業	500,000	300,000	200,000
	国際交流事業	3,000,000	3,000,000	0
	その他事業	0	0	0
雑収入		(280,000)	(150,000)	(130,000)
	受取利息収入	80,000	50,000	30,000
	その他雑収入	200,000	100,000	100,000
前期繰越		(3,315)	(9,853)	(△ 6,538)
	前期繰越	3,315	9,853	6,538
合 計		78,143,315	106,159,853	△ 28,016,538

支出の部

(単位:円)

勘定科目		予算額	前年度予算額	増・減(△)
大科目	中科目			
管理費		(10,085,000)	(9,455,000)	(630,000)
	給料手当	6,300,000	5,840,000	460,000
	旅費交通費	300,000	400,000	△ 100,000
	通信運搬費	400,000	400,000	0
	電話費	400,000	350,000	50,000
	消耗品文具費	150,000	100,000	50,000
	営繕備品費	50,000	50,000	0
	印刷製本費	700,000	600,000	100,000
	図書費	35,000	35,000	0
	貸借料	1,300,000	1,230,000	70,000
	光熱水費	150,000	150,000	0
	会議費	50,000	50,000	0
	広報費	150,000	150,000	0
	雑費	100,000	100,000	0
事業費		(68,050,000)	(96,700,000)	(△ 28,650,000)
	野外活動事業	0	100,000	△ 100,000
	高所登山事業	61,000,000	91,000,000	△ 30,000,000
	指導啓蒙事業	400,000	400,000	0
	機関誌発行事業	2,600,000	2,300,000	300,000
	出版事業	1,000,000	400,000	600,000
	国際交流事業	3,000,000	2,500,000	500,000
	その他事業	50,000	0	50,000
次期繰越		(8,315)	(4,853)	(3,462)
	次期繰越	8,315	4,853	3,462
合 計		78,143,315	106,159,853	△ 28,016,538

Ⅱ 基本財産会計

収入の部

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
運用利息	150,000	120,000	30,000
終身会費収入	1,500,000	750,000	750,000
前期繰越	6,150,646	5,118,416	1,032,230
合計	7,800,646	5,988,416	1,812,230

支出の部

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
次期繰越	7,800,646	5,988,416	1,812,230
合計	7,800,646	5,988,416	1,812,230

Ⅲ 別途会計

収入の部

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
賛助金	3,000,000	3,000,000	0
別途利息	8,000	7,000	1,000
前期繰越	234,808	225,898	8,910
合計	3,242,808	3,232,898	9,910

支出の部

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
借入金返済	3,000,000	3,000,000	0
次期繰越	242,808	232,898	9,910
合計	3,242,808	3,232,898	9,910

Ⅳ ヒマラヤ研究所会計

収入の部

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
調査研究収入	3,000,000	3,000,000	0
合計	3,000,000	3,000,000	0

支出の部

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
管理費	2,500,000	2,500,000	0
調査費	500,000	500,000	0
合計	3,000,000	3,000,000	0

事務局から

会費納入のお願い

本会の年会費は前納制となっております。昭和61年度分の年会費を速かに納入下さいますようお願い致します。

尚、6月30日までに納入されない場合は、「ヒマラヤ」に「前金切れ」の表示をして督促しますが、それでも納入されない場合は、会費が納入されるまでヒマラヤの発送を停止します。

年会費 6,000円

※終身会費制度もあります。詳細は事務局迄。

ヒマラヤの標高について

安藤 忠夫

俗に、世界の屋根といわれるヒマラヤの山々の真の標高はいったいどれが正しいのか、ということとは誰も大いに関心のあるところである。ネパールでは1983年に、カンチェンジュンガやローツェといった8,000m峰をも含めて、従前からの標高を大幅に修正した。それは本誌の第144号でも紹介されたところである。

昨年(1985年)、ブータンに入った登山隊からは、この国の山もまた、従来からの公式発表とは違って、実際の標高は相当に低いのではないか、といった声が伝えられる。

具体的には千葉大隊のナムシラが、ブータン政府の公式発表である6,500mに対して、登山隊の高度計は、西峰の頂で6,000m、東峰では5,815mを指していたといい、京大隊のマサ・カンでも7,200mに対し、500mあまりも低い値を示したようだ。そして一昨年のガンプー登山隊の報告もまた大幅に低かったことを伝えている。

これら日本隊の報告だけでブータンの大方の山が、標高が違うと決めつけることはできない。が、洋の東西をとわず、実際にはいくらか標高の低いことが事実として分かっていても、とにかく自国の山の高度を下方へ修正することには抵抗があろう。ましてやこれから観光立国をめざすブータンであってみれば、なおさら7,000m峰であることは貴重だと思われる。

じつは、山の標高が事実とは異っているということの種のことは、何もブータンばかりでなくてヒマラヤの全域にわたっていて、インド・ヒマラヤや中国チベットにもあるようだ。それは測量技術の面ばかりでなく、広大な大陸の遙かな奥地のことであったり、あるいはヒマラヤ地域に属する国

の人々の国民性とも相まっているのではないだろうか。

インドの東北部、いわゆるラダク地方もまた、インド政府の公式発表とは違って、実際には200mあまりは低いはずであると、私は常々から思っている。

それは、かつて本誌の第88号で、「ヌンは7,000m峰か」と題して記したところであるが、当時の結論は、カシミールの名峰ヌンの公式標高7,135mが、実のところ、6,900m台ではないのかと指摘をした。

昨年、私はH A Jが派遣したサセルカンリⅡ峰隊(1985年東部カラコルム日印合同登山隊……本誌第170号参照)に参加した。今回もまたこの辺り一帯の標高が、やはり公式発表とはかなり違っていきそうだと、その思いを新たにした。ここでは、その辺のいきさつを思い付くままに記してみるものである。

ラダク地方の中心都市レーの標高は、約3,600mといわれる。我々の隊もまた、インド側隊長が用意した5万図幅から拾って、持参した3台の高度計の針を、このレーの町で正確に合わせたことは言うまでもない。

そして、自動車道路では世界で最も高い所を通過するといわれるカルドン・ラ(5,486m)へ向かったが、不幸にもその峠に差し掛かる2kmほど前で、乗っていたジープが故障してしまった。我々は、やむなくその峠まで歩くことにして、チョウチョを追ったり、小石を拾ったりしながら思い思いに登って行った。

カルドン・ラのタルチョーの前で、高度計はその標高より230mあまりも低い5,250mの値を指

していた。そして、かつて苦しんだ5,500 mの標高とはとうてい思えないほどに、易々と体を運ぶことができたのである。我々は、その日までの3日間をレーの町で滞在していたので、あるいはすでに高度順化ができていたせいだろうとも思ってみるのだが、互いに半信半疑のままにこの峠を越えた。

その後、シャイヨーク河の一大支流であるヌブラ河の畔のピンチミック村に、ベースハウスを置いて登山活動に入ったが、この村は地図上で3,200 mの地点である。が、ここでも高度計は3,100 mを指していた。

以後、サカン氷河の末端のベースキャンプで120 m、キャンプ1で400 m、キャンプ2で250 m、キャンプ3で220 m、キャンプ4で250 mだけ、図上と比較して常に低い値を指していた。

この時の公式記録は、インド側および日本側隊長の協議によって、結局のところ高度計の指示を離れ、与えられた図幅から標高を読み取って発表したわけで、そのためにキャンプ1のように大幅な誤差の生じた地点もある。いずれにしても、今もって納得しがたいものが残っている。

なお、サセルカンリⅡ峰の標高であるが、我々の隊は、その西峰に登頂したものの、4人の登頂隊員のすべてがインド側隊員であったために、当日は高度計を運びあげず、今となっては残念なことこのうえない。

しかし、高度計の指示がレー以遠キャンプ3までのどの地点、特に山に入ってからには常に約200 mあまり低い値を示していることから、常識的に考えてサセルカンリⅡ峰の山頂でもまた、指針は

200 mばかり低い値を指すであろうことを予測しても不自然ではなかろう。

いずれにせよ、レーの町とカルドン・ラとの間で、高度計の振れにしたがえば200 mほどの差がありそうで、いつの日か、カルドン・ラ以北のシャイヨーク河一帯の全域にわたって、標高を改めることを要するのではなかろうか。

あるいはサセル山群の標高は、1906年の日野強少佐や1908年の大谷探検隊が、ヤルカンドからカラコルム峠を越えてスリナガルへ抜けた当時に、言われていた7,300 mという高度も、あながち一笑に付すこともできなからうかと思うのである。

とはいえ、あのサセルカンリⅡの峨々とした台形の峰や、秀麗な三角錐の峰のサセルカンリⅢの価値がいささかも下がるものではない。

一方で、この誤差の生じた原因の一つに、言われるところの、我々が使用した「トーマン高度計」そのものの読み取り値に起因するとも考えられる。

そこで、いささか乱暴ではあるが、こころみに京大、ヤルン・カン隊報告書（1975年発行）の……高度計の読み取り値の補正について……の項の補正值を、そのまま用いて再計算をしてみよう。

それぞれ前掲の誤差は、カルドン・ラで約160 m、ベースキャンプでは80 m、キャンプ1で330 m、以下170 m、115 m、140 mとなり、その誤差の幅が小さくなるものの、ここでもまた、100 mを越える違いがあることは事実であって本質的に変わりはない。

そして、最後にそもそもこの誤りの原因が、基準としたレーの町の標高にあるとも考えられるわけである。事実レーは緩やかな傾斜地に建設された町でもあるのだが、先の誤差が前記の補正值によっても、カルドン・ラとの間で150 mをも越えることを思えば、この数字はいかにも不自然ではないだろうか。

今ではレーは、連日、軍用機や旅客機が発着する町であって、標高3,600 mという数字が間違いないであろうことを記して、この項の筆を置くこととしたい。

（1986年3月18日、記）

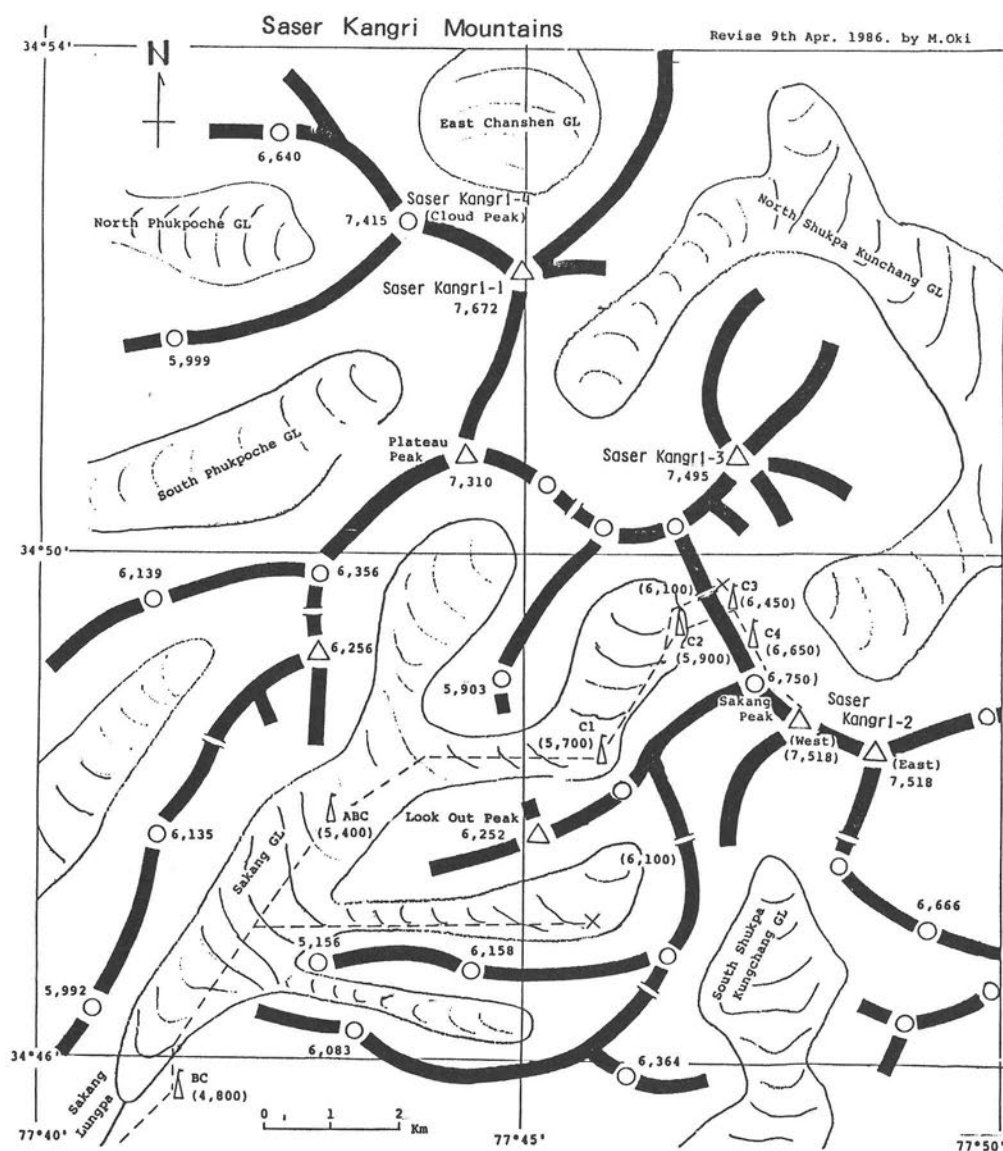


▲レーの高度は、3,600mか？

サセル・カンリ周辺のスケッチ・マップの訂正

標記の件について、Hukam Singh 隊長、Harish Kapadia (H J 編集者)、Nanavati (Himalayan Club 理事)、J. O. M. Roberts (Saser Kangri 西面偵察者)、M. C. Motowani (IMF)、沖允人などが検討した結果、次のような合意に達しました。

- 1) Saser Kangri 2 峰は、西峰と東峰とからなる双耳峰として地図などに示す。西峰の高度は、(7,518m)として括弧付で記す。東峰の高度は7,518mとして括弧無で記す。
- 2) 85年の日印合同隊が登頂したのは、Saser Kangri 2 峰の西峰である。従って東峰は未踏峰である。
- 3) Saser Kangri 4 峰(別名Cloud Peak)の位置は、Saser Kangri 1 峰から西北西にのびた尾根上にあるものとして地図などに示す。
- 4) Sakang Peakの位置は、Saser Kangri 2 峰から3 峰に続く尾根上にあるものとして地図などに示す。
- 5) Saser Kangri 3 峰から西に続く尾根上にある7,310mの峰は、Plateau Peak として地図などに示す。
- 6) 上述の結果、ヒマラヤ170号に発表したスケッチ・マップを下図のように訂正する。



■ 寸 感 ■

五月の連休に不帰の雪稜で楽しんできた。午後
のぐさぐさの雪に昨秋のガンケルの雪稜を想い起
こしながら汗を流してきた。

それにしても連休の山が、あんなにも静かだっ
ただろうか。そう云えばあんなにもガラ空きの列
車で山に入ったのも珍しい。“登山者が山から
消えた”と云われるのも判るような気がした。

子供の初節句があるからと一足先に八方尾根を
下ってみると下ではツボ足で下るのが恥しくなる
ほど大勢のスキーヤーが消えゆく雪を求めて滑っ
ていた。

事 務 局 日 誌 (5月)

- 4日(日) 遠藤副会長、山森事務局長、中国から帰国。
- 12日(月) 雪宝頂隊打合わせ
- 13日(火) トランゴ・タワー壮行会(高田馬場、32名)
- 14日(水) ヒマラヤNo. 175 発送

- 15日(木) キンナール隊打合わせ
- 16日(金) 事務局打合わせ(稲田、山森、尾形)
- 19日(月) トランゴ・タワー隊出発
ギャラ・ベリ、雪宝頂、ラブチュ・カン隊打合わせ
- 20日(火) キンナール隊打合わせ
- 24日(土) 昭和61年度理事会開催
昭和61年度通常総会開催
- 31日(土) キンナール隊打合わせ

ヒマラヤNo. 176 (7月号)

昭和61年6月10日印刷 61年7月1日発行

発行人 柴田 金之助

編集人 尾形 好雄

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号

ヒマラヤへのステップ!

エクスペディション & トレッキング

ネパール、インド、パキスタン、

ソ連(中央アジア)へ遠征、

トレッキングを計画の皆様へ。

航空券から登山要請、現地手配、入国査証
(ビザ)代介手続き、遠征隊・トレッキ
ング用山岳保険加入に至るまで適切
なトータルアドバイス、手配を受け
たまります。

ヒマラヤ以外にもヨーロッパアルプス、アフリカ、北・南・米etcの格安航空券、情報もあります。

世界山岳旅行クラブ

運輸大臣登録旅行業代理店業第2809号
住友海上火災登山トレッキング保険代理店

(株)マウンテン・トリップ

〒150 東京都渋谷区恵比寿1-8-1 かずさやビル3F 303号 ☎03-476-1200 担当 藤原

主催:(株)ロータリーエアサービス 〒105 東京都港区新橋2-2-4 ☎03-504-0111 担当・佐藤(一般登録第332号/取扱主任者・伊藤園子)



TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがご答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-574-8880

三井航空サービス代理店2452号



カラコルムの秀峰 ウルタル山

遥かなる高み

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



**株式
会社**

西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル5階 ☎03(237)1391(代表)

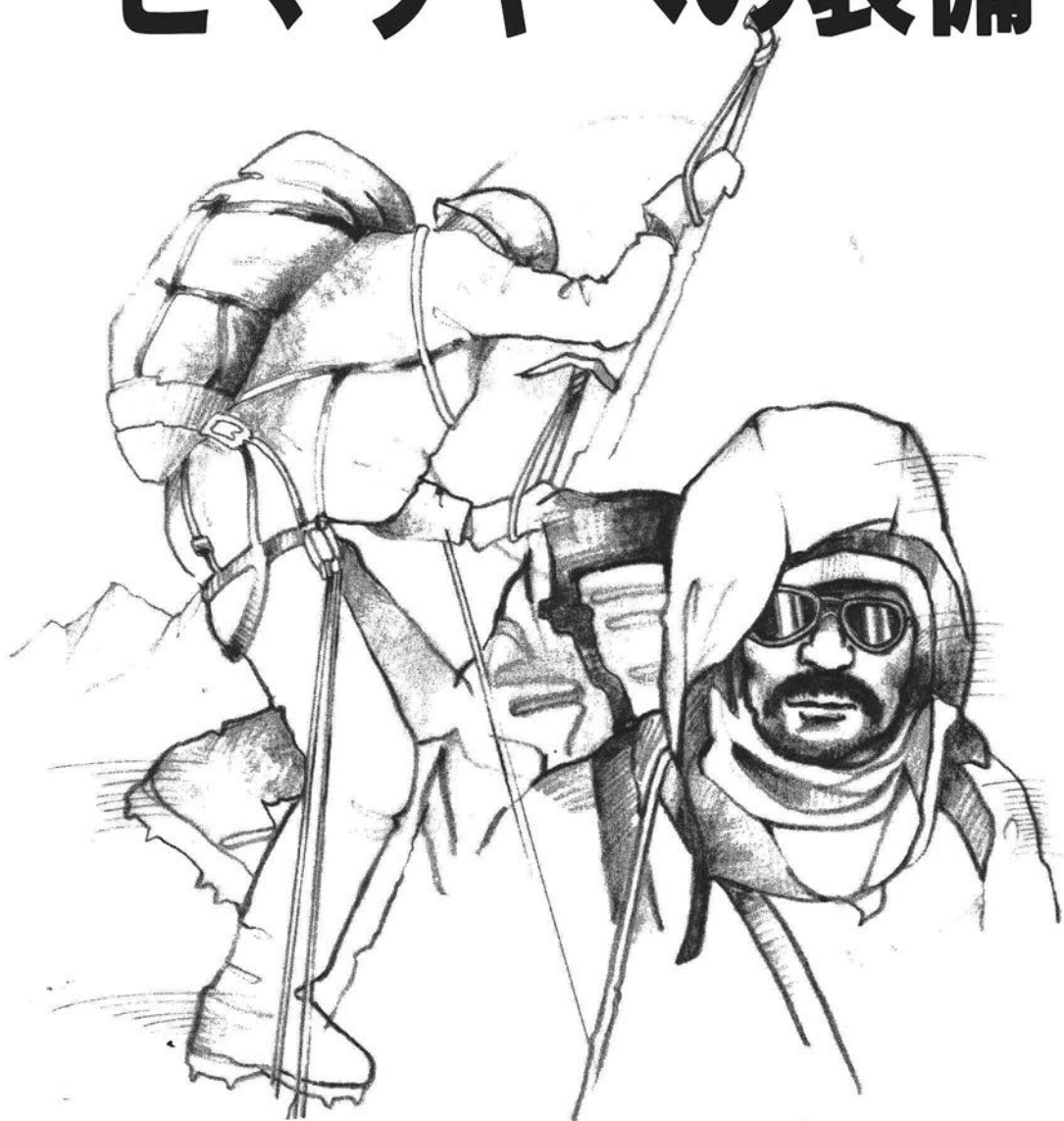
大阪営業所 〒541 大阪市東区平野町4-53-3ニューライフ平野町202号室 ☎06(202)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING (P) Ltd. P. O. BOX 3017

KATHMANDU, NEPAL ☎216338

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



ICI 石井スポーツ

- 登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2丁目2番3号 ☎03(208)6601~3
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2丁目123番地 ☎0486(41)5707
- 水道橋登山店 / 〒101東京都千代田区三崎町2丁目8番14号 ☎03(264)5575~6
- 神田登山店 / 〒101東京都千代田区神田神保町1丁目8番地 ☎03(295)0622
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区新宿1丁目16番7号 ☎03(346)0301(代)
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町6番地 ☎0273(27)2397(代)
- 札幌登山店 / 〒060北海道札幌市中央区南二条西4丁目4番 ☎011(222)5305
- 新潟店 / 〒950新潟県新潟市東大通2丁目5番1号 ☎0252(43)6330
- 仙台店 / 〒980宮城県仙台市東八番丁107番地の36号 ☎0222(97)2442
- 町田ジョルナ店 / 〒194東京都町田市原町田6丁目6番地14号 ☎0427(26)6248(代)
- フーズショップ / 〒160東京都新宿区百人町2丁目2番43号 ☎03(232)1286
- 外商部 / 〒160東京都新宿区大久保2丁目19番10号 ☎03(200)7219
- 事務所 / 〒160東京都新宿区百人町1丁目4番15号 ☎03(200)1004